

I 筑紫万葉（筑紫歌壇）

月野文子

☆筑紫（つくし／ちくし）

○「筑前」「筑後」

『和名類從抄』郡名には音仮名で読みを記すが、国名には読み仮名無し。

○『万葉集』では「筑紫」漢字二字の表記が多い。

○音仮名表記は「豆久志」（四三四〇）、「都久志」（四三七二・四四二八）、

「都久之」（四三五九・四三七四・四四一九・四四二二）、

「都久紫」（八六六）、「盡之山」（三三三三）

全て「つくし」と発音？

○『隋書』倭国伝 ↓「竹斯国」（＝筑紫国） （＝竹良）

○『続日本紀』天平宝字七年正月壬子「從五位上小野朝臣都久良為左中弁」

☆神亀から天平にかけて北部九州で作られた作品（歌は約320首）

○「筑紫で詠まれた歌」に限定する↓約320首

○「筑紫」を詠んだ歌も含めるか（作者は都）

○筑紫と畿内を往復する「旅の途中」で詠んだ歌の扱いは？

大伴坂上郎女思筑紫大城山歌一首

A 今もかも 大城の山に 霍公鳥 鳴きとよむらむ われ無けれども（巻八・一四七四）

和松浦仙媛歌一首

B 君を待つ 松浦の浦の 乙女らは 常世の国の 天乙女かも（巻五・八六五）

柿本人朝臣麻呂下筑紫国時海路作歌

C 大君の 遠の朝廷と あり通ふ 島門を見れば 神代し思ほゆ（巻三・三〇四）

☆大伴旅人と山上憶良が中心 ↓ 二人の共通点は「漢文体の作品」

○歌と漢文体作品の結合―その背後にあるもの

○同じ時期に大伴旅人と山上憶良が同じ場所に居合わせたのは偶然か

II 外交と漢詩文制作の関係

『懷風藻』↓編纂と序文は天平勝宝三年（七五一）

収載される作品は七世紀後半～天平初め頃まで

序文は我国の文学活動が成立するまでの展開を朝鮮半島との関係を絡めて説く。

天孫が日向に降臨し、神武天皇が東征して橿原に建都する時代までは「人文未だおこらず」であった。その後、神功皇后の征韓と応神天皇の時代に至り、百濟・高麗の入朝によって、漢字・典籍が伝わり、人々は孔子の学問に向かうようになった。その漢字による学問と思想を受けて、聖徳太子の時代になると礼・儀に沿って制度を定める

が、「未だ篇章にいとまあらず」と、文学活動というには至らなかったことを述べる。これが①の段落である。注目したいのは、②の段落の傍線部である。

『懷風藻』序文

① 逖聽前修、遐觀載籍。襲山降蹕之世、樞原建邦之時、天造艸創、人文未作。至於神妃征坎、品帝乘乾。百濟入朝、啟於龍編於馬廐。高麗上表、圖鳥冊於鳥文。王仁始導蒙於輕島、辰爾終敷教於譯田。遂使俗漸洙泗之風、人趨齊魯之學。逮乎聖德太子、設爵分官、肇制禮義、然而專崇釋教、未遑篇章。

② 及至淡海先帝之受命也、恢開帝業、弘闡皇猷、道格乾坤、功光宇宙。既而以爲、調風化俗、莫尚於文、潤德光身、孰先於學。爰則建庠序、徵茂才、定五禮、興百度、憲章法則。規模弘遠、匱古以來、未之有也。於是三階平煥、四海殷昌。旒纁無爲、巖廊多暇。旋招文學之士、時開置醴之遊。當此之際、宸翰垂文、賢臣獻頌。雕章麗筆、非唯百篇。但時經亂離、悉從煨燼。言念湮滅、軫悼傷懷。

③ 自茲以降、詞人閒出、龍潛王子、翔雲鶴於風筆。鳳翥天皇、泛月舟於霧渚。神納言之悲白鬢、藤太政之詠玄造、騰茂實於前朝、飛英聲於後代。余以薄官餘閒、遊心文囿。閱古人之遺跡想風月之舊遊。雖音塵眇焉、而餘翰斯在。撫芳題而遙憶、不覺淚之泫然。攀緝藻而遐尋、惜風聲之空墜。

④ 遂乃收魯壁之餘磊、綜秦灰之逸文。遠自淡海。云暨平都、凡一百二十篇、敕成一卷。作者六十四人、具題姓名并顯爵里、冠于篇首。余撰此文意者、爲將不忘先哲遺風。故以懷風名之云爾。于時天平勝宝三年、歲在辛卯冬十一月也。

傍線部意識

もとより天皇は、民人を教化する方法としては「文」を超えるものはない、徳が内から滲み出るようにするには「学」に勝るものはないと考えており、学校を建てて人材を育成し、礼儀や法制度を定めたのである。……。

その結果、世の中は良く治まって繁榮し、官僚は仕事が無くて暇になった。そこで天皇は文学の才子を招いて宴を開いた。その席で、天皇が詩を作って示すと、賢臣たちは天皇を頌える詩を詠んで献上したのである。

白村江の敗戦後、北部九州の軍事拠点の防備を固め近江へ遷都。その一方で、税収と兵力の把握のために戸籍制度を整え国力増強を図った。さらに海外との争いをさけるために新羅との外交を再開し、遣唐使を派遣した。文治を標榜することによって国内の安定を示そうとしたとみえ、その安定と平和を象徴するのが、『懷風藻』序文のいう君臣唱和の詩宴だったと思われる。見方を少し変えれば、詩宴は政治の安定と文化水準の高さを「蕃客」示すパフォーマンスでもあった。

応詔詩・侍宴詩

元日応詔

藤原不比等

正朝観万国

元日臨兆民

正朝に万国を観て、元日に兆民に臨む

斉政敷玄造

撫機御紫宸

政を斉へて玄造を敷き、機を撫して紫宸に御す

年華已非故

淑氣亦惟新

年華は已に故には非ず、淑氣も亦新なり

新雲秀五彩	麗景耀三春	新雲五彩に秀で麗景は三春に耀く
済済周行士	穆穆我朝人	済済たり周行の士、穆穆我が朝の人
感徳遊天沢	飲和惟聖塵	徳に感じて天沢に遊び、和を飲んで聖塵を惟う
初春侍宴	大伴旅人	
寛政情既遠	迪古道惟新	寛政の情、既に遠く 迪古の道の惟に新し
穆穆四門客	済済三徳人	穆穆たる四門の客 済済たる三徳の人
梅雪乱残岸	煙霞接早春	梅雪 残岸に乱れ 煙霞 早春に接す
共遊聖主沢	同賀撃壤仁	共に遊ぶ聖主の沢 同に賀す撃壤の仁

長屋王邸の「宴新羅使」詩―『懷風藻』に十首（いずれも秋）

- 数字は岩波大系本の作品番号 ※□囲みの番号は「序文」をもつ
- A 「初秋於長屋王宅宴新羅客」：62
- B 「秋日於長屋王宅宴新羅客」①：52（探韻なし）
②：60・63・65・71・77・79・86
- C 「於宝宅宴新羅客」：68（秋・探韻あり）
（探韻あり）

養老三年

- 五月乙未（七日）新羅朝貢使級浪金長言等四十人来朝。
- 閏七月癸亥（七日）新羅使人等献調物并騾馬牡牝各一匹献。
- 〃丁卯（十一日）賜宴金長言断等、国王及金長言等賜禄各有差。
（この日に白猪史広成を遣新羅使に任ず）
- 〃癸酉（十七日）金長言等還蕃。

養老七年

- 八月庚子（八日）新羅使韓奈麻金貞宿副使韓奈麻昔楊等来貢。
- 〃辛丑（九日）宴金貞宿等於朝堂、賜射并奏諸方楽。
- 〃丁巳（二十五日）新羅使帰蕃。

神龜三年

- 五月辛丑（二十四日）新羅使薩浪金造近等来朝。
- 六月辛亥（五日）天皇臨軒新羅使貢調物。
- 〃壬子（六日）饗金造近等於朝堂賜禄有差。
- 七月戊子（十三日）金奏勲等帰国。賜璽書曰：（以下略）。

Ⅲ 大宰府の役割と外交の家柄

☆「梅花宴」主要人物

- 大伴旅人（大宰帥）隼人討伐の將軍の経験。懷風藻に詩一首。父安麻呂も大宰帥。
一族に渡海（半島戦）経験者がいる。
- 紀男人（大宰大貳）懷風藻に詩三首。父麻呂、叔父古麻呂も懷風藻に詩。
弟の麻路は天平勝宝四年に大宰帥。従兄弟の飯麻呂は天平勝宝五年に大貳。
- 小野老（大宰少貳↓大貳）遣隋使小野妹子の曾孫。父・叔父は遣新羅使。

弟は遣新羅使と遣渤海使。天平九年六月、大宰大貳のまま卒。

○栗田大夫（大宰少貳↓大貳） 栗田真人（留学経験／筑紫大宰／遣唐使）の血縁。

○山上憶良（筑前守） 渡唐経験（遣唐録事）

○葛井大夫（筑後守） 大成。葛井広成（広成は遣新羅使。懷風藻に詩二首）。の血縁。
帰化系の白猪史氏が養老四年五月に「葛井」姓を賜る。

○張氏福子（薬師） 大陸もしくは半島からの渡来者。

☆『懷風藻』作者六十四名。（そのうち一首のみの採録が三十二名）

太宰府官僚であったことが明らかかな者 8名

○巨勢多益須（二首） 大貳（和銅三年三月） 従四位上

○荊助仁（一首） 少典（大宝年間の頃）

○石川石足（一首） 大貳（養老五年六月） 息子石川年足と豊成が大宰帥に。

○安倍首名（一首） 少貳（慶雲三年）

○大伴旅人（一首） 帥（神龜五年春以前） 父安麻呂も大宰帥

○紀男人（三首） 大貳（天平初め） 大貳兼任のままで右大弁

○藤原宇合（六首） 帥（天平四年） 西海道節度使に任じられ大宰帥も兼ねる。

○麻田陽春（一首） 大典（天平二年）

『律令』職員令 ※第五講義資料（八月十六日 佐藤氏資料 3頁） 参照

☆（大宰府）帥、掌ること……（国司と同じ内容）……蕃客、帰化、饗燕の事。

○白村江戦（唐と新羅） 討伐 ↓（大敗）↓防衛 ↓外交

当初は優先順位が低かった「蕃客、帰化、饗燕」が次第に重要に。

特定の家柄（氏族ではなく家）に「外交」が集中（―は親子関係、横並びは兄弟）

○大伴安麻呂（大貳）―旅人（大貳）―家持（少貳）

小贄（少貳）

竹良―滋野（遣唐判官）

○小野妹子―毛人―毛野（遣新羅使・大貳）―老（大貳）―石根（遣唐副使）

馬養（遣新羅使） 田守（少貳・遣新羅使遣渤海使）

○石川石足（大貳）―年足（帥）―名足（大貳）―真守（大貳）

豊成（帥）

○多治比真人池守（帥）・縣守（遣唐押使）・広成（遣唐大使）

○紀朝臣麻呂（帥）・男人（大貳）・飯麻呂（大貳）

☆理由を推測↓前例を確認するための資料の存在

- ・ 関係文書の写し・私的記録（日記）・外交用語・作文用例集など
- ・ 口伝など儀礼に関する知識（挨拶／饗譚の段取り／席次）

↓平安時代の『西宮記』『北山抄』（有職故実書）の如きものの存在を想定したい。

『北山抄』『花の宴』

清涼殿東又廂北第二間、立御倚子置物御机等、供御硯（天徳二年十月額北間、康保四年第三間云々）北階南簀子、敷菅円座、王卿座。桜樹下設文人座（西面北上）。庭中当御前立文台、呉竹坤角設楽所座、御殿砌下給侍臣絃歌者座（延長四年天暦四年例如之、是賞桜花也、天暦三年同十年、撤昼御座供大床子置物机等孫廂敷王卿座、
：（略）：次賜紙筆（殿上人賜王卿、蔵人所賜文人）、次依仰召第一儒士、令献題。

IV 大伴旅人の作品

甲 大伴淡等謹状

梧桐日本琴一面 對馬結石山孫枝

此琴夢化娘子曰 余託根遥嶋之崇巒 晞幹九陽之休光 長帶烟霞逍遥山川之阿 遠望風波
出入鴈木之間 唯恐 百年之後空朽溝壑 偶遭良匠 削為小琴 不顧質僂音少 恒希君子左
琴 即歌曰

いかならむ 日の時にかも 音知らむ 人の膝の上 我が枕かむ（卷五・八一〇）

僕報詩詠曰

言とはぬ 木にはありとも うるはしき 君が手馴れの 琴にしあるべし（卷五・八一一）

琴娘子答曰

敬奉德音 幸甚々々 片時覺 即感於夢言 慨然不得止黙 故附公使聊以進御耳

天平元年十月七日附使進上 謹通 中衛高明閣下（藤原房前） 謹空

此の琴、夢に娘子に化して曰く余、根を遥嶋の崇巒に託し、幹を九陽の休光に晞し、長く烟霞を帯びて山川の阿を逍遙し、遠く風波を望み鴈木の間に出入す。唯恐るらくは百年の後に空しく溝壑に朽ちむことを。偶に良匠に遭ひて削られて小琴と為る。質僂く音少きを顧みず、恒に君子の左琴たらむことを希ふ。（歌の遣り取り省略）

琴の娘子答へて曰く、「敬んで德音を奉ず、幸甚幸甚々」と。片時にして覺め、即ち夢の言に感じて慨然として止黙するを得ず。故に公使に附して聊か以て進御するのみ。

〔乙〕 梅花歌卅二首并序

天平二年正月十三日 萃于帥老之宅 申宴會也 于時 初春令月 氣淑風和 梅披鏡前之粉 蘭薰珮後之香 加以 曙嶺移雲 松掛羅而傾盖 夕岫結霧 鳥封穀而迷林 庭舞新蝶 空歸故鴈 於是盖天坐地 促膝飛觴 忘言一室之裏 開衿煙霞之外 淡然自放 快然自足 若非翰苑 何以 攄情 請紀落梅之篇 古今夫何異矣 宜賦園梅聊成短詠

（歌 三十二首 省略）

天平二年正月十三日 帥老の宅に萃まりて宴會を申ぶ。時に初春の令月、氣淑く風和らぐ。梅は鏡前の粉を披き、蘭は珮後の香を薫らす。しかのみならず、曙の嶺は雲を移し、松は羅を掛けて盖を傾け、夕の岫は霧を結んで鳥は穀に封じられて林に迷ふ。庭は新蝶を舞はせ、空は故鴈を帰す。ここに天を盖とし、地を坐として膝を促し觴を飛ばす。言を一室裏に忘れ、衿を煙霞の外に開く。淡然として自ら放たれ、快然として自ら足る。若し翰苑にあらざれば、何を以てか情を攄べむ。詩に落梅の篇を紀す、古今夫れ何ぞ異ならむ。宜しく園梅を賦して聊か短詠を成すべし。

〔丙〕 遊於松浦河序

余以暫往松浦之縣逍遙 聊臨玉嶋之潭遊覽 忽值釣魚女子等也 花容無雙 光儀無匹 開柳葉於眉中 發桃花於頰上 意氣凌雲 風流絕世 僕問曰 誰鄉誰家兒等 若疑神仙者乎 娘等皆咲答曰 兒等者漁夫之舍兒 草菴之微者 無鄉無家 何足稱云 唯性便水 復心樂山 或臨洛浦而徒羨玉魚 乍臥巫峽以空望烟霞 今以邂逅相遇 貴客 不勝感應 輒陳欵曲 而今而後 豈可非偕老哉 下官對曰 唯々 敬奉芳命 于時日落山西 驪馬將去 遂申懷抱 因贈詠歌曰

余、暫く松浦の県に往きて逍遙し、聊か玉嶋の潭に臨みて遊覽す。忽ち魚を釣る女子等に値ふ。花容雙びなく、光儀匹なし。柳葉を眉の中に開き、桃花を頰の上に発く。意氣は雲を凌ぎ、風流世に絶う。僕問ひて曰く「誰が郷の誰が家の兒らそ。けだし神仙ならむか」と。娘等皆笑みて答へて曰く「兒等は漁夫の舎の兒、草の菴の微しき者なり。郷もなく家もなし。何そ称へ云ふに足らむ。ただ、性は水に便ひ、また心は山を楽しむ。或ひは洛浦に臨みて徒に玉魚を羨み、或ひは巫峽に臥して空しく烟霞を望む。今以て邂逅して貴客に相遇ひぬ。感應に勝へず、輒ち欵曲を陳ぶ。今より後、豈に偕老にあらざるべけむや」と。下官對へて曰く「唯々。敬みて芳命を奉はる」と。時に、日は山の西に落ち、驪馬去なむとす。遂に懷抱を申べ、因りて詠歌を贈りて曰く

答詩曰

アあさりする 漁夫の子どもと 人は言へど 見るに知らえぬ うまひとの子と（八五三）

イ 玉島の この川上に 家はあれど 君をやさしみ 頭はさずありき（八五四）

蓬客等更贈歌三首

ウ 松浦川 川の瀬光り 鮎釣ると 立たせる妹が 裳の裾濡れぬ（八五五）

エ 松浦なる 玉島川に 鮎釣ると 立たせる児らが 家道知らずも（八五六）

オ 遠つ人 松浦の川に 若鮎釣る 妹が手本を 我こそまかめ（八五七）

娘等更報歌三首

カ 若鮎釣る 松浦の川の 川なみの なみにし思はば 我れ恋ひめやも (八五八)
キ 春されば 我家の里の 川門には 鮎子さ走る 君待ちがてに (八五九)
ク 松浦川 七瀬の淀は 淀むとも 我は淀まず 君をし待たむ (八六〇)

後人追和之詩三首 帥老

ケ 松浦川 川の瀬速み 紅の 裳の裾濡れて 鮎か釣るらむ (八六一)

コ 人皆の 見らむ松浦の 玉島を 見ずてや我は 恋ひつつ居らむ (八六二)

サ 松浦川 玉島の浦に 若鮎釣る 妹らを見らむ 人のともしさ (八六三)

甲：藤原房前に贈った「日本琴」に添えた書簡中の物語（琴Ⅱ旅人自身でもある）
嵇康の「琴賦」を想起させ、さらに「知音」の故事を埋め込む。

「竹林の七賢人」「詠懷詩」など話題の種は多い。↓楽器の話題へも

乙：梅花宴の序文は「蘭亭集序」を想起させる。「帰田賦」の語句も利用。

丙：「遊松浦河」（序）唐代小説『遊仙窟』の構造を借りて神宮皇后伝説に基づく行事を物語化。「洛神賦」「高唐賦」を思わせる語句、さらには『論語』雍也篇の「知者楽水、仁者乐山」まで鏤めて格調を高める工夫。

☆いずれも話題性に富む。歌を切り離しても可（乙丁は歌を漢訳しても可）
享受者の反応を想定―敢えて基づく作品のイメージを残す手法（原典の活用）

☆大宰府では唐客・蕃客の滞在中の無聊を慰める手段を考える必要がある

↓ 琴棋書画 文学交流 酒宴 歌舞：（自由外出は不可↓防衛上の問題）
滞在中もしくは送別（帰国）時に詩を詠む「場」を想定しておくのが基本。
大伴旅人は帰京後も同じような立場に置かれる可能性が高かった。

V 外交使節団（唐・新羅・渤海）の滞在期間（『続日本紀』による）

慶雲二年（七〇五）

○十月丙子（三十日）新羅貢調使来献

○十一月己丑（十三日）徴発諸国騎兵、為迎新羅使也

以正五位上紀朝臣古麻呂、為騎兵大將軍

○十二月癸酉（二十七日）新羅使等入京

○正月丙子朔（一日）天皇御大極殿、受朝。新羅使等在列。

朝廷儀衛、有異於常

○ 〃 己卯（四日）新羅使貢調。

○ 〃 壬午（七日）饗新羅使等于朝堂。奏諸方樂于庭。叙位賜祿各有差。

○ 〃 丁亥（十二日）新羅使等還蕃。賜其王勅書

和銅七年（七一四）

○十一月乙未（十一日）新羅国朝貢。差発畿内七道騎兵合九百九十、
為擬入朝儀衛也・

○ 〃 己亥（十五日）遣使迎新羅使於筑紫。

- 十二月己卯（二十六日）新羅使入京。率騎兵一百七十、迎於三橋。
- 正月甲申朔 天皇御大極殿受朝、皇太子始加礼服拜朝。
- 〃 己亥（十六日）宴百寮主典以上并新羅使。
- 〃 庚子（十七日）賜大射于南闈、新羅使亦在射列。
- 三月甲辰（二十三日）還蕃、勅大宰府賜綿五千四百五十斤船一艘。

天平四年（七三二）

- 正月丙寅（二十二日）新羅使来朝。
- 三月戊申（五日）召新羅使韓奈麻金長孫等於大宰府。
- 五月壬寅（十一日）新羅使金長孫等四十人入京。
- 〃 庚申（十九日）金長孫等拜朝、進種々財物并：（略）：。仍奏請来朝年期。
- 〃 壬戌（二十一日）饗金長孫等於朝堂。詔許来朝期以三年一度。：：：賜祿。
- 六月丁酉（二十六日）新羅使還蕃。

唐客・蕃客との詩詠

ア天平宝字三年（七五九）

- ・正月戊辰朔 御大極殿受朝 文武百官及高麗蕃客等各依儀拜賀。
- ・庚午（三日）帝臨軒、高麗使揚承慶等貢方物。：（以下略）。
- ・乙酉（十八日）帝臨軒、授高麗大使揚承慶正三位副使揚泰師從三位：（略）
- ・甲午（二十七日）藤原惠美押勝宴蕃客於田村第。勅賜内裏女樂并綿一万屯。

当代文士賦詩送別、副使揚泰師作詩和之。

イ 阿倍仲麻呂が遣唐使藤原清河らと帰国の際（七五三）、王維らが送別詩
ウ 天安二年（八五八）大宰府で唐客らが円珍に送別詩を贈る

「唐人送別詩并尺牘」（国宝）

エ 僧円載 承和五年（八三八）入唐。唐の乾符四年、帰国に際して、

陸龜蒙、皮日休、顔萱らが送別の使を贈る『全唐詩』但し円載は水難事故死。

才元慶年間には渤海使と菅原道真・島田忠臣らが共に詩を詠んでいる

「夏夜対渤海客、同賦月華臨静夜詩」（句題詩）など。

VI 大伴旅人の新しさ

☆漢文学世界の「序文＋詩」の「序文」を切り離して「歌」と結合させたこと。

☆「序文」を独立させて利用するという認識を持っていたこと

↓「蘭亭集序」王羲之の友人や身内が集まって詩を賦した際に年長者である王羲之が序文を書いた。しかし、この時の多くの詩は殆ど顧みられず、王羲之の序文だけが独り歩きしており、唐の太宗が気に入り模刻。↓拓本で流布

☆漢詩の「追和」という概念を「歌」に取り入れた。

国際化時代は語学力が基礎

○「学令」 凡学生先読経文、通熟然後講義

○「職員令」 音博士二人、掌教音

大学頭一人、掌簡試学生及积奠 ↓ 令義解「：学令云、学生先読経文、通熟然後講義。今依此文、明経生 必先就音博士 読五経音 然後講義」

○天平宝字五年正月乙未（九日）令美濃武藏二国少年毎国二十人習新羅語。

○中国語は留学生・留学僧↓還俗して官人になることも。

○『日本紀略』延暦十一年辛丑勅 明経徒不可習吳音 発声誦読既訛謬、習熟漢音。

※大伴家には新羅の尼理願が長年居住していた（七年乙亥大伴坂上郎女悲嘆尼理願死去作歌」卷三・四六〇と四六一）

【参考】

銜命還國作朝衡（阿倍仲麻呂）

銜命將辭國。非才忝侍臣。天中戀明主。海外憶慈親。伏奏違金闕。駢驂去玉津。蓬萊鄉路遠。若木故園林。西望懷恩日。東歸感義辰。平生一寶劍。留贈結交人。

送秘書晁監還日本國 王維

積水不可極。安知滄海東。九州何處遠。萬里若乘空。向國唯看日。歸帆但信風。鰲身映天黑。魚眼射波紅。鄉樹扶桑外。主人孤島中。別離方異域。音信若為通。

送圓載上人歸日本國 皮日休

講殿談餘著賜衣。椰帆卻返舊禪扉。貝多紙上經文動。如意餅中佛爪飛。颶母影邊持戒宿。皮神宮裏受齋歸。家山到日將何入。白象新秋十二圍。

重送 皮日休

雲濤萬里最東頭。射馬臺深玉署秋。無限屬城為裸國。幾多分界是亶州。取經海底開龍藏。誦咒空中散蜃樓。不奈此時貪且病。乘桴直欲伴師遊。

和襲美重送圓載上人歸日本國 陸龜蒙

老思東極舊巖扉。卻待秋風泛舶歸。曉梵陽烏當石磬。夜禪陰火照田衣。見翻經論多盈篋。親植杉松大幾圍。遙想到時思魏闕。只應遙拜望斜暉。

蘭亭集序（晉 三五三年） 王羲之

※『文選』には収載されず

永和九年歲在癸丑。暮春之初、會于會稽山陰之蘭亭、脩禊事也。群賢畢至、少長咸集。此地有崇山峻嶺茂林脩竹、又有清流激湍、映帶左右。引以爲流觴曲水。列坐其次。雖無絲竹管弦之盛、一觴一詠亦足以暢叙幽情。

是日也、天朗氣清、惠風和暢。仰觀宇宙之大、俯察品類之盛。所以遊目騁懷、足以極視聽之娛。信可樂也。夫人之相與俯仰一世、或取諸懷抱、悟言一室之內、或因寄所託放浪形骸之外。雖趣舍萬殊靜躁不同、當其欣於所遇、暫得於己、快然自足不知老之將至。及其所之既倦、情隨事遷、感慨係之矣。向之所欣、俛仰之間、以爲陳迹。猶不能不以之興懷。況脩短隨化終期於盡。古人云、死生亦大矣。豈不痛哉。每攬昔人興感之由、若合一契。未嘗不臨文嗟悼。不能喻之於懷。固知一死生爲虛誕、齊彭殤爲妄作。後之視今亦由

今之視昔。悲夫。故列叙時人、錄其所述、雖世殊事異。所以興懷其致一也。後之攬者、亦將有感於斯文。

典論 魏文帝 曹丕 (『文選』卷五十二)

：蓋文章、經國之大業、不朽之盛事。年壽有時而盡、榮樂止乎其身、二者必至之常期、未若文章之無窮。是以古之作者、寄身於翰墨，見意於篇籍、不假良史之辭、不託飛馳之勢、而聲名自傳於後。故西伯幽而演易、周旦顯而制禮、不以隱約而弗務、不以康樂而加思。：

歴代の大宰帥（初期は名称が異なる）

筑紫大宰帥（帥Ⅱ率）

蘇我日向 大化五年（六四九）五月

阿倍比羅夫 齊明朝（六五五年以降）↓蝦夷討伐（水軍）・白村江戦

筑紫率（率Ⅱ帥） ※六六一年から百済救援の為に西征、六六三年白村江で大敗

栗隈王 天智七年（六六八）七月

蘇我赤兄 天智八年（六六九）二月

栗隈王 天智十年（六七一）六月

筑紫大宰

屋垣王 天武五年（六七六）九月同年十月他所へ配流

多治比島 天武十一年（六八二）四月

栗田真人 持統三年（六八九）一月↓大宝年間の遣唐執節使（大使より上）

筑紫大宰率（率Ⅱ帥）

河内王 持統三年（六八九）閏八月

三野王 持統八年（六九四）九月

筑紫総領

石上麻呂 文武四年（七〇〇）十月

大宰帥

石上麻呂 大宝二年（七〇二）八月 正三位。

大伴安麻呂 慶雲二年（七〇五）十一月 從三位。大納言のまま兼任

栗田真人 和銅元年（七〇八）三月 從三位。養老三年二月薨。

多治比池守 靈龜元年（七一五）五月 從三位。

大伴旅人 神龜五年（七二八）春以前 正三位。天平二年大宰帥のまま大納言

藤原武智麻呂 天平三年（七三一）九月 正三位。大納言のまま兼任

藤原宇合 天平九年（七三七）以前 正三位。参議式部卿のまま兼任。

（大宰府 一時廃止）↓大宰少貳藤原広嗣（宇合の長男）の乱後

橘諸兄 天平十八（七四六）從一位。左大臣のまま兼任

藤原乙麻呂 天平勝宝二年（七五〇）十月 從三位。（正五位上少貳から神意による

拔擢）

紀麻路 天平勝宝四年（七五二）九月 從三位。中納言のまま兼任

石川年足 天平勝宝五年(七五三)九月 従三位。(在京?) ↓ (石川石足の息子)
同時に紀朝臣飯麻呂を大弐に任命。

天平勝宝八年(七五六)頃に吉備朝臣真備が大弐として赴任し怡土城を築く。

天平宝字四年(七六〇)舍人ら六人を大宰府に遣わし吉備真備に兵法書を習わす。

藤原豊成 天平宝字元年(七五七)七月 員外帥 (右大臣から左遷)

船王 天平宝字元年(七五七) 正四位下。(在京) ↓ 従三位 ↓ 三品

天平宝字三年(七五九)帥三品親王を香椎廟に遣し新羅を伐つべきを奏上。

藤原真楯 天平宝字四年(七六〇)一月 従三位。

藤原恵美真先 天平宝字六年(七六二)

藤原宿奈麻呂 天平宝字八年(七六四)

石川豊成 天平神護元年(七六五) ↓ (石川石足の息子)

弓削御浄清人 神護景雲二年(七六八)

藤原宿奈麻呂 宝龜元年(七七〇)

石上宅嗣 宝龜元年(七七〇) ↓ 淡海三船と並び称される文人。(父は乙麻呂)

藤原百川 宝龜二年(七七二) ↓ (藤原宇合の八男)

藤原蔵下麻呂 宝龜二年(七七二)

藤原魚名 宝龜八年(七七七) ↓ (藤原房前の五男)

藤原浜成 天応元年(七八一)

藤原魚名 天応元年(七八一) 左大臣兼任

藤原継縄 延暦四年(七八五) ↓ (藤原宇合の孫)